

豫科練



No.476 令和5年

5・6月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.19…	2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》……………	3
○第56回豫科練戦没者慰霊祭のご案内……………	4
○雄翔園の五葉松を伐採しました……………	5
○救出飛行の最終便……………	5
○三四三空隊史⑱……………	11
○さらば予科練⑩……………	15
○華々しき戦闘の蔭に②……………	18
○雄翔館見学者所感……………	21
○海原会寄付者芳名簿……………	22
○事務局日誌……………	22

公益
財団法人

海原会

海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 辞世

書簡・遺書

石井 正行

昭和二十年五月二十八日沖縄海域にて特攻戦死
神風特別攻撃隊第八七生隊 十八歳 特乙一期 広島県

書 簡 (家族あて)

一 拝啓 桜花咲き乱れる頃となりました。

家中皆様には、お変わりなくお暮らしですか。お伺い致します。私も元気で軍務に励んでおりますゆえ、ご安心下さい。戦もますます烈しくなってきました。

敵機の広島進入も、日夜烈しくなつて来たようですが、皆様もその都度防空に励んでおられることと思います。私も毎日訓練しております。

敵も我が本土にやってきました。我々の先輩は夜を日に攻撃を続けており、戦果を挙げております。私も、攻撃に行く日を待ちつつ、日夜訓練しております。

歌にもありますように、咲いた花なら必ず散って行きます。私もあの桜のように、いさぎよく散っていく覚悟です。今は軍隊のみが戦うのではなく、国民全体が特攻隊となつて、この大東亜戦争を勝抜かねばならない時です。

町も大分変わったことと思います。永い間家から便りがないので心配です。今度写真を撮りましたから、お送り致します。

家中の皆様のご幸福を祈ります。

遺 書

覚悟ハ出来テ居ル。正行本来ノ望ヲ果シ、皇土ヲ護リ通ス。

悠久ノ大義ニ生キル正行ノ笑顔ヲ送リタイガ、嬉々トシテ死ス。同期ノ姿方五枚、遺品ニ添エテ有リマス。

父母上様、ドウゾ正行ノ成功ヲ見テ下サイ。

弟輝夫ニモ、正行ノ後ヲ継ガセテ下サイ。

誓ッテ敵艦船ヲ轟沈セン。

第56回豫科練戦没者慰霊祭のご案内

一 偲ぶ集い

日時 令和五年五月二十七日（土）午後六時開宴
 場所 ホテルマロウド筑波
 会費 六千五百円／一名

二 慰霊祭

日時 令和五年五月二十八日（日）雨天決行
 午前十一時（受付九時開始）

場所 雄翔園 陸上自衛隊土浦駐屯地武器学校内

※ 受付場所・予科練平和記念館横広場

会費 参加者 三千円／一名（ご同伴者同額です。）

会費はお弁当代及び慰霊祭実行費用として使用させていただきます。

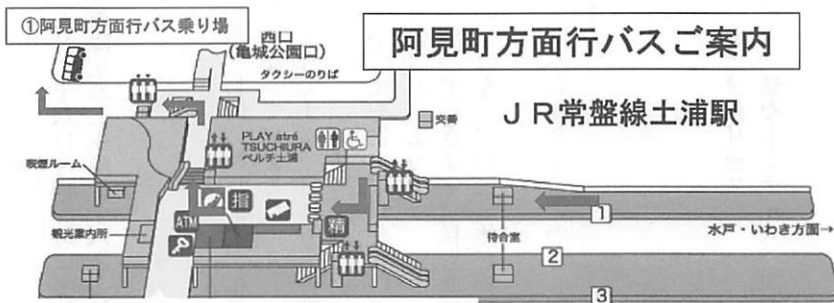
三 玉串料の奉納

ご高齢等のために慰霊祭にご参加いただけない会員皆様には、玉串料を募集させていただきますので、奉納を希望される方は、同封の「郵便振込取扱票」をご利用ください。
 奉納されました玉串料で、生花を二人像に奉納いたしますとともに、ご芳名簿を作成して奉奠いたします。

連絡先 「第五十六回予科練戦没者慰霊祭実行委員会」

TEL 029-886-5400

今回から専用バスによる送迎はありませんので、会場へは公共交通機関をご利用ください。



阿見町方面行バスご案内

JR常盤線土浦駅

- 関東鉄道バスは「阿見中央公民館」
 JRバスは「江戸崎行」にご乗車ください。
- 慰霊祭会場最寄り降車バス停は「阿見坂下」又は「阿見」です。
 （関東鉄道バス） （JRバス）

慰霊祭会場は、「阿見坂下」又は「阿見」で降車し徒歩2分の場所です。



バス時刻表

関東鉄道バス (阿見中央公民館行)	JRバス (江戸崎行)
07:05	07:47
07:30	08:00
08:05	09:10
08:20	10:35
08:45	
09:15	
09:45	
10:15	

雄翔園の五葉松を 伐採しました。

雄翔園開園以来、入口に配置された狛犬と共に、長年にわたり来園者の目を楽しませてくれていた五葉松一対のうち一本が、松くい虫の虫害により立ち枯れてしまいました。

このため令和五年三月六日午前十時、武器学校広報班員の手により伐採いたしました。伐採に先立ち、日頃から雄翔園の管理を担当して戴いている武器学校総務部長武石様と海原会平野事務局長の二人で、供養のための献酒を行うとともに、無事故での伐採作業を祈念してお塩によるお清めを行いました。

長年連れ添った五葉松が、一本となり寂しくなりますが、これまで同様に来園者をお迎えさせていただきますので、来園の折りには是非お目を止めていただければと思います。

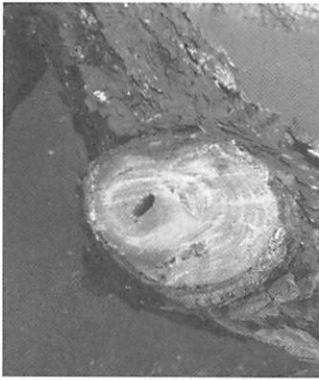
事務局



献酒とお清め



伐採の様子



松くい虫侵入経路

この記事は、海原会懸賞文に応募された作品です。

(事務局)

救出飛行の最終便

第一航空艦隊司令部附

元海軍少尉 岩崎 嘉秋

米軍リングエンに上陸す

昭和二十年一月八日、私は第一〇二一航空隊附を命ぜられた。突然の発令に慌しく身

辺を取りまとめ、四日後には鈴鹿基地と別れ、一式陸攻を操縦して台湾の高雄基地に赴任した。ついで三月五日には、第一航空艦隊司令部附となり、大西瀧治郎中将の傘下にはいった。

そのころ、クラークに態勢をととのえていた第一航空艦隊は、レイテ湾を発進してルソン島上陸をめざした米艦船

を、リングエン沖合にむかえて、航空機の総力を投入したが、残念ながらその殆どを失い、高雄に撤退せざるをえなくなっていた。司令部を小崗山の洞窟内におき、おもに台湾の設備態勢をかためながら、翼をうしなつた海軍航空隊の将兵を、ルソン島から救出することに追われていた。

私は着任した翌日から、情勢の悪化したニコラスフィールドやクラークフィールドに飛び、これらの飛行場から海軍の将兵を台湾に救出することに神経をつかっていた。

しかし、一月九日に米軍がリングエンに上陸してからは、これらの飛行場をつかうことはきわめて困難になった。そこで、海軍の残留部隊の将兵は、止むを得ずルソン島を北進して、エチャゲヤツゲガラオの飛行場に移動しなければならなかったのである。

だが、エチャゲヤツゲガラオは、すでに米軍の制空権下にあつて、間断なくしつよう

な爆撃をあびていた。それでも日本軍は、飛行場の補修をくりかえして、友軍機の離着陸のために整備を怠らなかつた。それは自分達の救出を可能にする唯一の道であり、またこれらの飛行場以外からは、もはや救出できなかつたから、何が何でも補修、整備に死力をつくさなければならなかつた。

マニラ平原を北上する残留部隊の労苦は、言語を絶するものだった。彼らのほとんどは栄養不良におちいり、マリヤや Deng 熱病や南方潰瘍におかされいるものが多かつた。落伍者も出たということであつた。彼らには見るに耐えないありさまで、長い間かかつてようやく飛行場にたどりついたのであつた。

マニラを脱出するとき、将校も下士官も兵も古い衣服を脱ぎ捨て、真新しい服で身なりをととのえた。丸腰の将兵が、激戦の渦中から抜け出すことが出来さえすれば、この

まま日本に帰還できると信じた者さえいた。

彼らは移動の準備を急がなければならなかつた。敵は、すでにリングエンに上陸して南下し、マニラ市を奪回することは明らかだつた。奪回されれば、衣糧倉庫も敵の手中におちいることは必然であつた。だから、衣服の支給をおしむ理由はどこにもなかつた。食糧にしてもそうである。ただし、食糧の携行には限度があつた。いかに栄養価が高かろうとも、重量がふえてはこまるのだ。また、どんなに貴重なものであつても、重量物はさけなければならなかつた。何百キロもの道のりを持ち歩くことを考えれば、それは当然すぎるのであつた。が、

彼らは申し合わせたように足カセとなる重い貴重品を忘れなかつた。

小型トランクは一見、携帯に便利なようであつた。そのトランクのなかには、手のきれるようなま新しいペソ軍票

のタバが、すきまもなくぎつしりつめこまれていた。それは、米軍機による爆撃に逃げまどうときも、肌身はなさず持ち歩いていたに違いない札束であつた。

ところで、ツゲガラオへの道のりは長かつた。軽かつたはずのトランクは意外に重く、苦勞の度合いは日一日と増していった。疲勞と病魔は、ややもすればトランクを手ばなす寸前にまで追いこんだ。けれども彼らは、重い貴重品を手ばなそうとはしなかつた。命のある限り、持ち続けようとすのかたい決意は、悲愴そのものでしかなかつた。

かつて私は、マニラ市が日本軍に占領されてまもないころ、内地からダグラス三型機に積めるだけ積んだペソ軍票を、ニコルス飛行場に運んだことを知っていた。あれから二年半たったいま、バラまかれた軍票の一部は将兵の手ににぎられ、一度も使われずにま新しい姿のまま逆コース

をたどり、少なくとも台湾まで戻れる可能性にあるのであつた。

うちきられた救出作戦

昭和二十年六月中旬、司令部から比島救出作戦うち切りの指令が出された。沖縄作戦が、きわめて重大な段階にはいつたからである。加えて、台湾にあつた実用機の消耗とその補充のため、本土からの空輸すら困難になつていたからでもあつた。

また、せつかく救出のため飛んでいっても、飛行場の補修が不完全のため、着陸してから爆弾の穴に車輪をとられたりして、虎の子の飛行機を破損してしまうこともあつたからだ。こうなると、その乗員を救出するために、さらに台湾から別便を仕立てなければならぬという、二重のわづらわしさに悩まされたのであつた。

救出うち切りの指令は、司

司令部としてやむをえない措置であった。けれども、多くの銃をもたない航空機搭乗員や地上勤務員が、ルソン島にとり残されているのである。一部は陸軍の指揮下に編入された者もいたが、陸戦については足手まといの素人の域をでない者ばかりであった。

一方、救出飛行の出発基地である高雄飛行場の情勢も、日一日悪化するばかりで、中国大陸に基地を持つB 29が、大編隊を組んで襲来し、またレイテを手中にした米軍機は、連日定期便のように飛来しては爆弾の雨を降らせていた。われわれは、昼間大見栄をきって飛びかうことは出来なくなつた。特にP 38の跳りよくなす術もなかつたのである。そこで殆ど毎日、用意した弁当を手にして、ピストルや軍刀と僅かな私物を手にして夜明けと共に飛行場からはなれていった。そして、一日じゅう山に避難していて、夕陽が沈む頃思い思いに戻つて

くるといふありさまであつた。このような情勢にあつたある日、思いがけない救出飛行命令が私に与えられた。これまでの情勢から察して、待ちにまつたラウレル大統領一行が、ようやくツゲガラオに到着したのだ、と私は思った。

と言うのは、それまで半月の間、大統領一行をツゲガラオから救出すべく私は待機させられていたからだつた。

ところが、実際は大統領救出の飛行ではなかつた。この任務とは別に、救出作戦最後の便として、陸軍と海軍がそれぞれ一機ずつを、ツゲガラオへ出すことになつたのとのである。

（今度は台湾に戻つてこれないかも知れない）という不吉な思いが脳裏をかすめた。ミイラとりがミイラになるおそれが多分にあつたからだ。

その日、一日中照り続けた太陽が、南シナ海に沈もうとしていた。あかい太陽と入れかわつて、吾々は山を下りて

きた。飛行場の周囲にはまだ残照があつて、掩体壕から引き出された虎の子の飛行機が、かすかに迷彩を映し出していた。整備員が、飛行準備にせわしくたちまわっているのが見えた。

私は指揮所ちかくにいて、飛行場の片隅で準備中の飛行機に搭載する物件を、あれこれ考えていた。生水を詰めた一升瓶をできるだけ多く、蚊帳、キューネとその他の医薬品、台湾新聞、古雑誌などなど。

私は、準備したこれらの物件を、トラックに積んで飛行機に運んでゆくのを確かめてから指揮所の内に入つていった。何時ものとおりに、出発前の注射を肩にしてもらつた。小さなアンプルに入った注射液で、牛の目玉から採取されたものだ、と若い軍医はいつた。「牛四頭を殺して、わずかにこのアンプル一本しかとれないのだからなあ。」軍医は二、三回かるく振つ

たアンブルを目の高さにあげて、すかして見ながらつぶやいた。これを注射すると、夜間の視力が増して不思議によく見えることは、これまでに何回か私は経験している。

無謀という名の救出行

当時、われわれパイロットは昼間は出来るだけ眠り、夜間飛行にそなえて目を大切にしなければならなかつた。昼間は眼帯をかけていて、暗夜になじませるなどの努力もした。

夜十時、暗闇の飛行場にとどろく爆音を私は五体でしかと聞き入つていた。出発前の愛機の試運転なのである。爆音を聞くにつけて、任務は重く肩にずしりとのしかかり、それは腹の底までしみとおるのであつた。

私は、指揮所前で、見送りの人の列に無言の挙手で別れをつげた。暗くて誰彼の判別はつかかなかつた。ライトを消

した車で、暗い飛行場を横切り、愛機の側へ私は運ばれていった。座席を取り外した空胴に近い機内が、満載した将兵とともに再びこの地に戻ってくることを祈らずにはいられない。私は、こう念じながら操縦席に腰を据えた。

離陸して左に旋回し、しばらく台湾の西海岸ぞいに飛んだ。左前方にオーランピー岬が、海の色よりなお黒くつき出ているのが見えた。針路をアパリに向けると、洋上飛行となる。いよいよ台湾とお別れなんだ、という気が胸をしめつける。それほど、この夜の洋上飛行は暗くさびしかった。

航路上の天候は、良いとは言えなかった。が、それはむしろ幸いなのだ、と自分に言い聞かせながらハンドルを握っていた。ダグラス三型は、丸腰なのだ。七・七ミリの機銃一丁さえもたずに、敵地のりこむ、この度胸は、まさに無謀と言うべきか。天候が

良ければ、敵の戦闘機が上空で待ちかまえているはずだ。

「むしろ、もっと天候は悪い方がよいのだ」と、くり返し自分に言い聞かせながら、一路南に向かつて飛びつづけた。

バシー海峡もすぎて、バスコが雲のあい間にみえ、やがてルソン島のアパリの町を私は確認した。いよいよのカガヤン峡谷である。月あかりはないが、カガヤン河はあたかも、のたうつ大蛇のように、暗黒の大地に鉛色の河面をうつし出していた。

ツゲガラオの飛行場は、カガヤン河にそって南下すれば右側に見えるはずだ。私は、アパリをすぎるところから、とくに見張りをきびしくするよう、搭乗員に警告していた。あと数分して、ツゲガラオに着こうとするころだった。

私は、カガヤン河の西側に火柱があがったのを見た。ゲリラが爆音を聞きつけて狼煙をあげたものと咄嗟にそう思った。それにしては何時もの

狼煙とは違って、火柱が中天にとどいている。火勢は火勢を呼んで凄烈だ。それに青白い炎さえ見える。まっくらな大地に燃えさかる深紅の炎は、いつこうに衰えを見せないのであった。

そしてこの火炎は、着陸しようとする私に、ツゲガラオの飛行場をはつきりと映し出してくれるのであった。これまで何回となく通ったせいと、飛行場はカガヤン河の特異な曲がり方をした西側にあることも目安になって、私にははつきりと判るのであった。けれども、この火炎は、初めてツゲガラオに飛ぶパイロットに対して、飛行場のありかを明確に教えたであろうと思われた。

私は、これまでの目安であった河の曲がりくねった上空から、右に旋回して西にむかい、飛行場に接近していった。さきほどから見えていた火炎は、私の飛行機のすぐ前方に迫ったとみるや、あつと言

う間に私はその火炎の真上を通過した。尻のあたりが不気味だった。

もう、降下姿勢に移らなければならぬ地点にきている。それにしても、まっ暗な飛行場に向かって降下するのは度胸が要る。そこに不吉な何か待ち受けているようで、不安にかられるのだ。

飛行場の両端には、小さな灯りが一つづつおいてあるが、その他は全くの暗い海だ。飛行場の照明は、多いにこしたことはない。が、多くの灯は、敵の哨戒機に目標をあたえ、爆撃と銃撃を招く恐れがある。いよいよ着陸態勢にはいった。飛行機は、まっくらな大地にすい込まれるように降下してゆく。偵察員は、私のすぐ後ろに立って高度計を読んで知らせる。第六感に頼る無灯火着陸だ。

「七〇メートル…五〇メートル…三〇メートル…二〇、一〇メートル…」と呼称した声が、ひとときわ高くひびいた。

その瞬間、暗黒の大地が私の網膜に迫った。と、みるや、無意識のうちに私は機体を引き起こす操作を行っていた。にぶいシヨックは、機体が接地したことを知らせた。

私は、前方の小さな目標灯に向かつて、無心に直進をつづけた。少しでも外れると爆弾の穴にめり込むからだ。ブレーキをフルに使いながら、早めに行き足を止めた。それでも目標灯は、早い勢いで目の前に近づいた。目標灯のさきは爆弾の穴で、補修されなのまま放置されていることはたしかだった。

目標灯のすぐ手前で、ようやく行き足を止めることが出来た。そして、その場でエンジンのスイッチを切った。目標灯は消された。あたりには静かな夜だけがあった。

燃えつきた陸軍機の最終使

待ちに待っていたであろう海軍地上部隊の指揮官が、暗

闇の中から現れてきた。私は、挨拶もそこそこに、台湾から運んできたみやげ品を引き取って貰った。暗くて彼らの喜ぶ顔を見ることは出来なかつた。が、荷物を受け取った四、五名が吐いた礼の言葉に、表明し難い喜びの色が発散した。

「機長、ありがとうございます。おかげで、日本の水をたんまり飲めます。それに、今夜からは蚊帳の中でぐっすり眠れます。こんなぜいたくはありませんよ。機長！ありがとうございます。申しわけありません！」

息を切らして走ってきた者がいた。そして、せきこんでいった。

「機長！よく着陸できましたね。よかったですね。私どもはハラハラしてみています。： たった今、陸軍機が河の近くでやられました。あなたが着陸するちよつと前です。ほら、あそこで燃えているでしょう。あれがそうです。みるでしよう」

私は、彼が指さす方向を見た。燃えさかるあの火炎の上を通ったのは、ほんの一、二分まえなのだ。そう言えば、高雄を出発する前に、陸軍から一機同じ目的で最終便を出すことは聞いていた。炎上したのは、その飛行機にまちがいがなかった。

「夜間戦闘機が帰ったばかりです。そのうち、交代機がやってくるでしょう。ほら、ゲリラが狼煙をあげはじめましたよ。飛行機が着陸したことを知らせている証拠です」と、教えてくれた者がいた。

高雄の一航艦司令部は、ツゲガラオの夜間戦闘機の襲来する時間を、無電によつて毎日克明に調べていた。その結果、一日のうち何分かはツゲガラオ飛行場上空には、戦闘機が待機しない時刻があるのを統計上からつきとめた。上空待機の戦闘機が帰って、つぎの番と交替する時刻がいわば穴だった。

実を言うと、その時間帯に

見あうように計算して、われわれは高雄を発進したのであった。その計算は、まさしく的中したのである。

だが、私は急がなければならぬと思つた。交替のためには帰つたあと、まもなく別の敵戦闘機が飛んでくるにちがいないからだ。

それにしても、陸軍機が撃墜されたことは残念だった。陸軍機は、翼の前縁にある着陸照明灯をつけて着陸しようとしたから、敵にねらわれたらしい。灯りは、戦場では禁物だった。

私は、赤い布辺でつつんだ懐中電灯をつけて、さっそく搭乗の手配をした。横隊に並んだ搭乗予定者は、ナンバーを書きつけた大きな丸いボール紙を、首から垂らして静かに立っていた。この日を、一日千秋の思いで待っていたのに違いない。

「今回の便は、〇〇番からは、〇〇番まで、その次の番号からは、後日の便にする」

私はこういいきつた。だが、私は次回の便がないことを知っている。それだけに、言い終わったあとで、胸がじわじわしめつけられるのだった。

第一線での戦斗から逃れ、ようやくここまで辿りついた将兵に、敢えて言わなければならぬ。飛機機の搭載量には限界がある。私は、急いで搭乗者の手荷物を調べなければならなかった。各自の手荷物は、五キロ以内に制限されてはいたが、搭乗者の多くは重量オーバーの手荷物をもっていた。

その中身は、ペソ軍票であることも私には判っていた。何回もの救出飛行で、その都度ペソ軍票でいっぱいの特ランクを見せつけられてきたからだ。

肉体の安全が約束されると、そのつぎに望むものはいったい何んであるのか。台湾に飛んでしまえば、どんなことにも使えるペソ軍票である。その時刻は、あと数時間後に迫

っている。病魔と闘いながら、肌身はなさず持ち続けた理由もここにある筈だ。

だが、この日の私には、なぜか彼らの気持が不純に見えて仕方がなかった。否、いまだおりさえおぼえるのを制することが出来なかった。戦争は終わったのではない。いまにも、敵の夜間戦闘機が襲来し、銃撃をくりかえすかも知れないのだ。

私にしてみれば、このような任務飛行が、ほかのいかなる戦闘よりもはるかに苦しいことを、身をもって体験している。それだけに、彼らの意中が無性に悲しいのである。特ランクの中身が読めるだけに、冷静であるべきこの場での判断を、ことさらに硬直させたのかも知れなかった。

あたえられた任務は、将兵の救出でこそあれ、それ以外のなものでもないはずだった。私は、救出のたびごとに、彼らの分別について悩まずにはいられなかった。ぶじに飛

び立つことが出来ても、途中でなにか起こるか判らない運命の飛行なのだ。

戦場に捨てられた札束

私は、あらかじめ三〇名を乗せる考えでいた。一人当たり五キロの手荷物は、三〇名では一五〇キロになる。これは、人員約三名に相当する。

私は心を決めた。(そうだ、みんなの手荷物を捨てさせることだ)と。

「各自の手荷物は、全部捨ててほしい」と、私は勇気をふるってきり出した。

「命があつてこそ必要な荷物だ。今は、この俺を含めてその命さえ保証出来ない。運よく台湾に脱出できたら、そのときあらためて考えればよいではないか。この基地に残る戦友のために役立つよう、残しておいてくれまいか。俺は手荷物よりも一人でも多く、みんなの仲間を乗せて帰りたいのだ。どうか!」

私は、興奮した口調でこう訴えた。しばらく沈黙がつづいた。まっ暗な飛行場では搭乗予定者の表情を窺うことはできなかった。だが、私の眼はある一つの行動に焦点が絞られた。ひとりが、静かな足どりで私の前に歩み出たからだった。彼は、手にもった特ランクを私の足もと近くにそつと置いて、黙つてもとの列に戻つていった。持ち主から手離された小さな特ランクが、夜の大地に一際黒い孤独なかげを投げ、そのためもあつてあたりがうつつろな寂寥がたまたよった。

だが、その静寂は、またたく間に破られた。ひとりの行為は、連鎖反応を呼んで、にぎにぎしい行動がその場に展開されたからである。次から次、と、三〇名の特ランクは私の眼の前に並べられ、全員は無一物になつて、もとの位置に整列したのである。そして、再び夜のしじまにかえつた。このとき、

「機長！そうしてください。機長のいわれるとおりに」と、最右翼にいた一人がこう言い、さらに言葉をつづけたが、整列している搭乗予定者の口から、一斉に湧き起った声にかき消されて聞こえなかった。

「お願いします。機長お願いします」

整列者のまとまった声は、あたりの静寂を破った。必死の叫び声となつてどよめいた。

私は熱い眼頭をおさえて耐えた。私の意中をくみとつてくれたことで、無性に嬉しかったのだ。ありがとうと心の中で泣いていた。しかし、私は打ち明けられない一つのことに悩み抜かなければならなかった。そして、これが最後の救出となる事実に耐えなければならぬことも。私は、赤い懐中電灯の光で、自分の知っている人はいないだろうかと整列者の顔をのぞいて歩いた。だが、見覚えのある顔はなかった。だれも

かれも、髭ぼうぼうで、眼だけが鋭く光っていた。

私ははやく飛行機に乗るように告げたついでに、「福島県出身の人はいないか」と聞いてみた。ところが、「基地指揮官がそうです」と、ある者が言った。

私は、さっそく赤い懐中電灯を指揮官の顔に向けた。私の知っている人ではなかった。だが、なぜか同県人に親近感を抱くのであった。それはきつと、祖国を遠く離れての戦争が、あまりにも殺伐とし、あまりにも寂寥としていたからであつたらうか。または、同じ風土に培われた少年の心を確かめ合いたかつたのであろうか。

三四三空隊史 18

三〇一飛行隊長

菅野直大尉のこと

菅野大尉とは戦死された八月一日まで三カ月たらずであつたが、大村基地の山の麓にあつた宿舎で寝食を共にした。隊長の豪胆な肝つ玉から発する判断は明快であつた。「神雷を切り離すチャンスを見失つたら、神雷を抱いたまま突っ込んだらよい。最後の時は敵の一機でも喰いついて道づれにしてやるよ」といつて烈々たる闘魂をたぎらせていた。

八月一日敵機をなぎ払う任務をもつて出撃する。一五〇〇頃屋久島南西上空にて敵機と交戦する。菅野大尉の三〇一飛行隊が高度七千米、四〇七飛行隊が六千米、私の指揮する七〇一飛行隊（駕淵隊長戦死後、私は七〇一飛行隊へ転属となつた）が五千米で、南進中敵B-24の編隊二十四機くらいが、高度三千米で北上しているのを発見する。護衛戦闘機がくっついていようか、見張る一瞬の間、流れ星の如く降ってきたP-51戦闘機が見えた。「敵戦闘

機上空にあり。注意!!注意!!」と警告を発信し、不利な態勢たてなおしのため高度を下げてB-24の編隊群のなかに突っ込んでいった。あちこちにP-51の機影が見られ本日の乱戦をもの語っている。B-24の編隊は右に旋回しながら高度をぐんぐん下げて退避する。ぼつぼつと見えていた機影は姿を消し、僚機が十数機集つてくる。

一七〇〇頃大村基地へ帰投する。隊長菅野大尉還らず。時刻は矢のように流れてゆく。生還を神に祈るのみ。本日の戦闘を見ると、菅野隊（三〇一）と光本隊（四〇七）は敵P-51戦闘機の大群と激突し、私の隊（七〇一）はB-24の攻撃に廻つた。菅野隊長機とは距離が少し開いたのだ、その最後を確認し得なかつたのは申し訳ない。海軍の至宝、菅野大尉を失い、七月二日林隊長、七月二十四日駕淵隊長を失つた。だんだんと上司が少なくなつてゆく。

ご冥福を祈ります。

木下一周大尉のこと

あなたとはバリックパパンの戦闘六〇二飛行機隊で一年寝食を共にし、一緒に三四三空に着任した。あなたは東京帝大の経済学部から第十期飛行予備学生となり、その課程を終えて、私より半年まえにバリックに来ておられた。飛行隊長が京大経済学部卒で予備学生一期の尾崎貞雄大尉であり、多士済々のメンバーであった。飛行訓練には極めて厳しく、八つほめて二つ注意するのが教育の指導原則である、という持論を持つておられたのが印象的である。

昭和二十年二月シンガポールに飛行機を受けとりに行った。帰路バンカ海に二番機の浜島上飛曹が墜落するという事故があった。あなたは、試飛行の良否、誘導の方法等の適否などについていろいろと検討し、苦悩の色をありあり

と浮べておられた。部下思いの柔剛あわせもった指揮官でした。戦闘七〇一戦闘機隊分隊長として着任、六月末源田司令が急迫する沖繩の戦況を自らの眼で確かめたいということになり、あなたは、直衛機の指揮官として六機の紫電改を率いて離陸した。夕闇迫る一九三〇すぎに帰投した。「木下大尉いかがでした」との質問に答えていわく。

「敵機と空戦するより、何倍もの神経を使いました。着陸するまで緊張のしどろしどろだよ。」

三四三空は司令に源田大佐をいただき、歴戦の勇士達がひしめいていた。そのなかに親子にもまさる愛情と強いきずなで結ばれていたのである。木下大尉の責任の強さと隊員にかける思いやり等、頭の高さがることばかりでありました。七月五日珍らしく大村基地で四〇七と七〇一の野球試合をやった。篤測隊長の三塁打、木下大尉の二塁打等、そろば

んの必要なスコアで両隊の試合が終った。その直後攻撃命令を受けて発進し、鹿児島南方上空にて戦死された。惜しみてあまりある好漢今はなく、その御霊はどこに帰られたのでしょうか。一緒に着任した人達もぼつぼつ欠けてゆく。淋しい極みである。木下大尉、どうかわれわれをお護りください、と祈ったことでした。

上島逞志大尉のこと

上島中尉は、昭和十九年八月バリックパパン基地に展開中の戦闘六〇二飛行隊に分隊長として着任された。同期の内山敬三郎中尉も同時に着任された。敵の大型機による来襲も真近いという予想で、訓練は猛烈を極めた。

背面直上方攻撃という戦法で、高度三千米で吹き流しを引つ張った目標機に対し、四千米の高度で翼の機銃部分が交叉したのを見てからすぐ様背面飛行にうつり、軸線を合

わせて背面ダイビングに入る。そして機銃掃射しながら、直角の角度で尾翼後方を突き抜けて行くというやり方で、これを二〜三回連続して攻撃するのである。眼がくらみ、頭がくらくらする。

林啓次郎大尉、服部敬七郎中尉、内山敬三郎中尉と啓敬が三人揃い、人事局は次は誰をよこすのかと冗談をいい合った。上島中尉は同期同室の内山中尉の死に大きなショックを受けたようである。

日本に帰る機会があったら、必ず御家族に報告したいといっていたが、戦後お母さんと電話で話す機会があったので聞いて見たら、その責めを果たしたとのことであった。彼は茶目で朗らかで、われわれの間では人気ボーイであった。約九か月の交際であったが心から敬愛する人であった。

戦闘四〇七の指揮所に運ばれた時の彼の死に顔は、まるで生きているそのまま、眼

つているとしか思えないような安らかな顔をしていた。「おい!!上島大尉どうした!!起きろよ」体をゆすつても、もう返事は返ってこなかった。生と死の境界はどこにあるのであろう。寸刻まえには笑い興じていた友が、もう屍になっていいる。こんなことがあつてよいものであろうか。一緒に飛び廻つた南の島々のことが、走馬灯のようにかけ巡る。あなたの飛行服に秘められた写真と、あなたの部屋の机の引き出しのなかの写真は、棺の中に入れてあげました。君の最愛の人達と一緒に安らかに眠ってください。

大塩貞夫大尉のこと

大塩大尉とは、二十年五月より約三か月のおつきあいでした。私が分隊長で着任した時既に分隊長として活躍されていた。指揮所のソファに腰掛けてよく君と一緒に語りあつたことを憶えています。

気のあつたところがあつたのかも知れない。試飛行はあなたや上島大尉が主力になつてやつてくれたので分隊長の私は大変助かりました。ある日「分隊長、あの飛行機は二回試飛行にあげりましたが、二回とも上空にてエンジンストップです。手におえませんか」という申出である。頼まれて嫌とはいわないのが仁義、私は試飛行にあげた。整備分隊長植松大尉にきくと、「地上でのテストは異常ない。どうも分からんのでよくテストしてくれ」ということである。高度三千米、エンジンストップしても飛行場に迂りこめる位置を選んで試飛行にはいる。瞬間エンジンがストップした。命からがら飛行場に迂り込みことなきを得た。

エンジンのプラグの発火位置がずれることが原因であつたようである。血と涙と汗を流して一緒に闘いましたね。

昭和二十年八月八日午前十

時、全飛行隊が発進する。総指揮官戦闘四〇七の光本大尉(隊長)、中隊指揮官として大塩大尉、石塚光夫少尉がついた。私は戦闘七〇一の指揮官機として、戦闘四〇七の後方に編隊をくんだ。高度約五千米にて敵戦闘機の傘の下に入り、福岡上空にて血みどろの空戦を展開した。君は遂に還らず。

私は被弾して飛行機に火がつき、猛火に包まれて墜落、落下傘にて脱出した。片腕はちぎれ、全身火傷したが、いち命はとりとめ得ました。長生きは恥多しです。君を支援することが出来ず、今も胸の痛む思いです。惜しみて余りある好漢、借すに日月をもつてすれば、どんなことでもなし得る才の君を思うと涙が流れます。

八月八日の戦闘は劣位から立ち上りましたが、よく戦果を挙げ得たのはあなたの功績と思う。

戦後あなたの御宅を訪ね、

司令と古賀整備長と共に焼香させていただきました。君の尽忠の赤心は、永久に大塩家に承継がれて行くことでありましょう。どうか在天の霊よ、御家族を御守りください。

成瀬上飛曹のこと

君は一年有余にわたり、私の三番機として行動を共にしてくれた。戦闘六〇二飛行隊のバリックパパン以来、三三三三空戦闘四〇七飛行隊においても、君は常に私の側にくれた。紅顔の美少年でいつも輝く澄んだ瞳をしていた。年令二十一才、素晴らしい中堅搭乗員であつた。君とは昭和二十年二月比島南方のポロ島の撤収作戦に行った。途中あなたがエンジン故障でタラカの南方のジャングルのなかに不時着してしまつたことがある。私はタラカン基地根拠地隊司令官末吉大佐に御眼にかかり、救援隊の派遣を御願いたしました。末吉大佐は私が機関

学校生徒の時の教官であり、快よく承知してくれた。ポロ島の昔兵団の撤収作業が終了し、一週間後タラカン基地に掃投したところ、君が飛行場にニコニコして立っているではないか。その時は嬉しくて涙が出たよ。食べのものは、猿に石を投げつけて、あわてて逃げる時に落としてゆく木の実を横盗りして食って命を長らえたとのことであった。ケロツとしていう言葉には、苦笑せざるを得なかった。こんな俺を心配させておきながら運の強い男がいるものだ。

四国の方に要務で行っています。暫らくかかると思いますが。空襲のはげしいことですから一回国に帰っておられる方がよいのではないかとおすすさつて御帰りの日程が決定したらご通知ください。」その夕刻旅館に御両親を訪ねあなたの活躍ぶりを御話ししました。航空食糧の御土産しかなく、申し訳ありませんでした。帰りの切符を大村駅長に頼みこみ、数日後国に帰られました。一日あなたの戦死がずれていたなら、懐しい懐しい御両親に会えたのに、残念でなりません。昭和二十二年五月、あなたと、そして比島にて戦死されたあなたの兄さんの葬儀に出席し、弔事を読ませていただきました。思えば思うほど涙が流れます。あの故郷の森のなかで安らかに眠っているあなたを何時も思い浮かべています。御冥福を祈ります。

久多見政行

上飛曹のこと

あなたとはバリック以来一年一緒に行動した。二十年二月ボルネオブルネー沖に大船団が見えるとの報に接し、偵察に行ったことがある。誤報であったが、ブルネーの飛行場は爆撃により穴だらけで着陸は命がけだった。

そして離陸にはさらに苦勞したが、無事帰投出来た。二月某日の夕刻偵察に飛来したB-24を捕捉し、ついに撃墜した君の腕前には敬服した。

二十年八月八日福岡上空して戦死す。惜しい人を失った。君の尽忠報国の精神は永久に久多見家に残り語りつがれることでありましょう。どうか安らかに御眠りください。

石塚光夫少尉のこと

私が分隊長として着任後三か月のおつきあいでした。髭

をはやして、とてもよいお父ちゃんでした。愛称は「チャン」でした。ほんとうにあなたにびつたりの愛称でした。あなたはまた、飛行場に残飯をあさりに出てくる野良犬にも優しい愛情をもち、われわれがいじめるととても怒りました。本当にやさしいお父ちゃんでした。八月八日の戦闘で熊本上空にて戦死されました。チャンの顔、そしてやさしい御気持は今も忘れられません。安らかに御眠りください。

久世一飛曹のこと

あなたはバリック以来一年行動を共にした。林啓次郎隊長の三番機としてよく努められました。紅顔可憐な少年でした。散髪屋で頭の上に長い毛を少し残して、分隊長これは長生きに通じるまじないです、といつて大笑いしました。茶目で美少年で、頭の切れる人柄は飛行隊全員に可愛がら

れました。八月八日壮烈な戦死をとげました。しかしあなた達の雄々しい尽忠の精神と、純真に生きた一生は、私には忘れられない印象です。どうか故郷の森で安らかに御眠りください。御冥福を祈ります。

さらば予科練⑩

乙飛十九期 山田 稔

羽田の空

空襲下の飛練生活

よしんば同じ航空隊で教育しても、名称が違えばなんてことなかったのである。

即ち、乙は従来通り予科練、丙は操練、甲はさしずめ家庭で中学教育を受けて入ったので「特別飛行幹部練習生・通称特飛練、または特幹練」とすれば良かったのである。

昭和二十年五月、甲飛を受け入隊した作家、故城山三郎氏の名称は、特別幹部練習生

(一五、五四〇名その大半が、水中特攻)なんてことはない。甲は当初からこうすればよかったのに、全く呆れた話である。兵学校並みの宣伝文句で甲が入ったところ、ジョンペラ服で休暇で帰らぬものも出たり、スト体勢を引き、当局に待遇問題で要望書を出す、昭和十七年十一月七つボタンもその一つ。

話を東京空へ戻そう。前述の「蒼空賦」によれば、十九期と甲十三期(二分隊)と剣道大会が開かれ、三浦貞夫・菅野一両選手らが奮い見事優勝し、大いに期名をあげた記事がある。

司令は藤村大佐(後に少将)分隊長は山内大尉、分隊長に寺内少尉等がおられ、教員には柳谷兵曹(後述)乙十七期の関戸上飛曹他に甲十二期、特乙の教員がいた。無事隊門をくぐり、その後も空襲の余波で何事もなく過ぎたもの、寝る場所も掛ける物もない始末。

「そら、寒いから飛行服を出してやったぞ」と柔剣道場にゴロ寝の私たちに、持つべきものは全く先輩だ。関戸上飛曹の温情は今も忘れ難い。

こうして羽田のいや、東京の初めての一夜は夢も見ずに明けた。後、宿舎は使用してない二階建ての新聞社の建物に移り、しばらくして木造バラックの兵舎に変わったが、ここにいた練習生または、他の兵はどこに移ったのであるうか？

さて十六日の空襲の状況は、米艦載機F6F「ヘルキャット」F4U「コルセア」戦闘機、TMB「アベンジャー」攻撃機、SB2D「ヘルダイバー」急降下爆撃機が日本側判断計七波(延九四〇機)翌十七日早朝から昼過ぎにわたって四波(延五九〇機)航空・港湾施設に襲撃した。

これに対し海軍は、雷電・零戦・紫電改等、陸軍は疾風飛燕が邀撃に発進、果敢な戦闘の結果、大本営発表の両日

の戦果は撃墜二五七機(米軍発表八八機)、我が方七八機となっているが、地上被害も加えれば損失は約一〇〇機になるだろう。

米報告では日本機撃墜三四一機、地上破壊百九〇機とのことで、お互いのオーバーは混戦につきものの、誇大発表(誤認を含む)を差し引いても日本軍の敗色は否めない。

とんでもない空襲という有り難くない歓待裡に入隊した私たち飛練生活は飛行訓練開始等といった悠長な段階ではなく(すでに三月以降、飛練そして予科練教育は中止と決定、本土決戦体勢に順次組み込まれていった)

そして、ここ羽田でも中練特攻隊が編成され(二五名、二隊)一番隊の隊長は山内大尉、二番隊はカリフォルニア育ちの今村隊長、全般指揮は副長の清水少佐である。

飛行訓練も急降下訓練に切り替えられ、さらに夜間編隊飛行訓練が実施された。

この夜間訓練のときは、夜食に温かい「おじや」が出て、私たちもお相伴に預かった。「うまい、ほつぺたが落ちそうだ」何もせず不埒と牛ころしが飛ぶような次第だが、警報発令ともなれば、広い飛行場一杯に飛行機分散作業で汗かくのだ。

今は第四滑走路も出き、当時、牡蠣養殖で時たま無断生で海水の塩加減宜しく、美味しく頂いた遠浅の海も次第に埋め立てられ、当時と考えられない広大な空港となったが、穴守稲荷の祠は今もあるだろうか？。

その辺りは芦や葦が沼地を囲み優良な鴨場で、大きな松の根方にはその幹に負けないほどの大蛇がいたという。多分、だんだん生息地を追い詰められ、主として住み着いてしまったんだらう。こんなのが今、ミニスカートのお姉さんの足下に出たら大騒ぎとなるだらうな？

当時の羽田は、穴のあいた

芝生の飛行場は三方を海に囲まれ、短い滑走路の訓練で、この卒業生は特に空母等で優秀とのことであった。ある日の飛行訓練で、九三中練が飛行場の端で止まらず、急上昇をしたため失速し、尻から運河に落ち、それでも搭乗員はずぶ濡れで上がってきた。

陸軍の場合もつとひどい。一度空戦で降りた飛燕が、二十耗機銃弾をいっぱい詰めたまま、格納庫の中へ飛び込みカーブして飛行機にぶつかって、やっと止まったが大破、よく機銃弾がハネなかつたのが不幸中の幸いというものであろう。

私たちの飛行訓練は一体どうなつたのだらうか？機体やエンジンの座学の外は、防空壕施設の整備、そして飛行場周辺の民家の取り壊し作業に狩り出された。ギッシリ立ち並んだ家は強制立退きさせられ、人一人いない住宅街、床に敷いた新聞紙が埃に舞い、柱にロープをかけ引き倒すの

だが、家もイヤイヤするのだらうか、なかなか一辺という訳にはいかない。

考えれば軍事施設（羽田飛行場）を守る為の火災の類焼を防ぐという破壊だが、なんという無駄なことをしたのだらうか、飛行場には本格的な空爆はなかつたのだから。

三月九日午後四時三十分グアム北飛行場、サイパン・テナアンから合計三二五機が東京を目指した。翌十日未明、B29は単機内至数機づつ、高度二〇〇〇m前後の低空を東京湾から続々侵入し、江東地区を南から北へ飛び、投弾しては銚子方面へ抜けていった。

折からの強風にあおられ、火はたちまち燃え広がり、下町一带は炎に包まれてしまった。一六六五トンの焼夷弾により八三〇〇〇人が死亡、一四〇〇〇〇名が負傷、二十六万戸が全焼した。

私は飛行場から、その光景を目撃していた。そして一夜

明けて対岸を見て驚いた。電柱や煙突を残してすべて広々とした焼野原と化していた。同期生の中にも東京出身者が六名おり、留守宅はどうなつただらうかなど皆で心配しあつた。

この夜間大空襲はB29の飛行高度が低く、飛行部隊（ほとんど陸軍機・層龍）も高射砲隊も有利に戦闘を続けてたが、やがて煙にさえぎられて反撃が困難となった。当日の戦果は、米軍発表によれば十四機損失、四十二機被弾といふ。

四月に入つても空襲は続いた。当初主に夜間のみであったが、この頃より、昼夜堂々と襲来した。（冒頭記事を参照）。また、夜間では十三日赤羽兵器廠、十五日東京・川崎を襲った。この時と思う。空襲後の復旧作業応援のため、トラックに乗り多分大井辺りと思われる。

舗装道路の周りは消防署の

コンクリート建物を残して一面焼け野原、作業は水道の復旧工事でマンホールの中へはベテランが入り、私たちは監視、然し人一人、車一台通らずカンパン一袋もらって帰路についた。

東京に来て、初めて渋谷の百貨店で映画を見たが、その渋谷も焼けてしまった。この先どうなるのだろう。然し、悪いことばかりは続かない。五月一日、思いがけず突然二飛曹に任官した。帽章も代え、右手に二飛曹のマークをつけたら、やたらに手をあげたくなった。処でここで私の自慢話を一席、乞うお許しを。

戦後、私の家宛に履歴表が送られてきたが、その履歴の最後の方、任官の項に続き、五月九日「侍従武官御差遣二際シ紙巻下賜るセラル」と下手な字が続いているが、何を隠そう、かくいいう私が書いた（書かされた）のである。

次第はこうである。私が兵舎にいたら「山田兵曹ちよっ

と」と甲十二期の教員に呼び出された。

何事ならんと向こうの兵舎に行く。「まアこれを喰べてくれ」とパイナップ。その内やおら、履歴表の束を見せ、ここにこう書いてくれとの事。買取されてイヤダメですとも言えず、只渡されたインクとGペンには参った。今までGペンで書いた事が全然ない。兵舎から私の万年筆をと思つたが、何やら秘密めいているのでままよと認めたら、御案内の如き悪筆になってしまいました。

でもなぜ、私が字がうまい（？）ということを知つたのか？。更に紙巻きタバコをみんなに見せても、分けもせずネコババしても山田ならきつと黙っているだろうと誰が決めたのか？今も履歴表を見ると苦笑いがこみ上げてくる。映画もよく柔剣道場で催された。時代劇俳優の阿部九州男氏が定員分隊にいて、どこかの倉庫から持つてくるのだ

という。

「ロビンフッドの冒険」や「暗黒街の弾痕」といった洋画、いずれも名作揃いで私も彼らしき人物を一度隊内で見かけたが定かではない。

外出は日曜・祝日十二時間、麦飯弁当を持つて出る。

ある日外出員整列で並んでいたら、寺内分隊長が来て、「いやア、全くお前らはいいよ、羨ましいよ」との御言葉。えっ、私は士官である分隊長の方が素敵でいいなアと思つたが、考えてみれば全く天衣無縫、只遊ぶことだけ考え、何も屈託なし、全くそうかもしれない。処で外出の時、穴守稲荷線で切符を買つた覚えはない。

改札口を出る時も入る時も、挙手の礼をすると、女子駅員は笑つて通してくれる。（呆れていたのかも知れない）。

五月になって空襲の激化に伴い、私たちも東京空を引き上げ、いよいよ元の古巣霞空へ戻る事になった。

そこで将来またどうなるか、行先不明なので私は一度思い切つて、埼玉の実家に帰つてみることにした。外出区域は東京・川崎なのでもちろん脱外出（違反）である。

それに家にいる時間もあまりないが、交通は池袋から電車で一直線しかも、家は駅から約五分で足の心配はない。ところが、一つ手前の小川町駅で三種軍装の下士官を見たのでビックリ、家に帰つて父に聞くと、赤十字小川病院が海軍に接収され使い始めたという。終戦後、この病院にいた軍医がそのまま町で開業し、現在も続いている。

「今日は風もちょうどよい。グライダー訓練をやるう」寺内分隊長の発案で、幸い飛行機の発着も訓練飛行もない。海に面した芝生の飛行場の片隅を使い、滑空が始まった。三重でやつてから（私たちは三十時間以上訓練した）半年以上経つたので一寸勘が狂い、私はグライダーが上昇すると、

若干桿をおさえたため、空中でややバウンドしてしまった。降りたところ分隊士に「どうだ、恐いのか？」と言われた。しまったが、憧れの飛練、それも東京羽田へ来て晴れやかな五月の空を飛んだ気持ち、また格別であった。 続く

華々しき

戦闘の蔭に②

平山 幸夫

と同時にまたもや機体後部に大きな衝撃を受けた。

「敵だ。」と叫び乍ら左の、副指揮官席の天井窓から「零戦隊は。」と見上げたところ、直上五、六百米の処にいた五機編隊は、敵二番機に急降下で突き込んでいた。敵二番機はロールを打った直後火を噴き、大地に吸い込まれるように眼前で落ちて行った。

その後零戦隊は五機編隊のまま、敵一番機を追撃したが、

あまり深追いすると危険だと私は直感した。私は間髪を入れず、次の応戦のため、後部に行くことを機長に届けて、タンク室のドアを開けて、後部へ走った。途中タンク室では、あちこち穴が開き、ガソリンが噴出していた。よくも爆発しないものだ、不思議に思い乍ら、後部へ到達すると、離水直後の事として、後部両舷の二十ミリ、後部中央上部の七ミリ七、最後部の二十ミリ共に射撃準備は未完了であった。

飛行艇は離水時、後部一帯は水を被るので、離水銃座の窓を外して、射撃準備をするのである。後部では四名の後輩が、機銃の装着に専念しているが機は動揺し、急いでいるので仲々装着困難である。

よくよく見ると、右舷二十ミリ銃架は敵弾によって破壊されていた。装着を諦め、辺りを見廻すと梅村慶蔵二飛曹（甲六期）が艇底に倒れている。「おい、どうした。」と大

きな声で助け起そうとしたが、どうにもならない。

左大腿部を大きくやられて「傷は浅い、しつかりしろ。」と励まし、鶴岡雄二郎上整曹（九志）を呼び寄せ、

大腿部をロープで巻き、止血の応急処置をしたが、負傷の場所が場所だけに、巻き止めることができなかったのだ。

それはあまりにも重傷であった。既に救助していた零戦の乗員は後部ベッドから跳ね起き、「どうしたのですか、零戦の誤発ですか。」と心配顔で問いかけてきたが「馬鹿者!!」と怒鳴りつけてしまった。

硝煙と血の交錯した戦場独特の臭気の中に、後輩を激励して、応戦の準備をしていると、後部機内に煙が漂い始めた。

「火災、火災」と叫び乍ら発火場所を探して廻ると、酸素吸入器の格納箱から発煙している。藤本義隆飛長（丙三期）は咄嗟の機転で、半長靴で踏み消そうとしたが、逆に火の

元は広がってしまった。横田稔二整曹（十三志）、山口上飛（丙七期）の四人の協力で、側にあった満タンの飲料水タンクを放出して消し止めることができた。

一段落したところで、皆の顔を見ると藤本飛長と山口上飛は腕を負傷して流血していた。横田二整曹の如きは真正面から頭部上方を長さ五センチにわたって頭髮を剥ぎ取られていたが、あと三ミリ下であれば、即死であつたらうと思はれた。

ベッドにいた零戦の乗員は不思議にも負傷しなかった。梅村二飛曹のことは気掛かりであつたが、私の職場もあるので、前席へ行く為に、後部のタンク室のドアを開けて入ったところ、燃料は依然として噴き出していた。爆発しなかったことを、又も不思議に思い乍ら、前席に帰り、後席の状況を高橋機長に報告した。機長は直ちに状況を打電するよう命じたので「不時着乗員

を救出するも、離水時、敵戦闘機の奇襲を受け、梅村兵曹重傷、他三名軽傷、基地到着予定時刻〇七三〇」を暗号化して打電し、基地の了解を得た。

味方零戦隊は敵一番機を追撃したままなので、我が艇は傷ついた羊と同然、取り残されてしまったが、運を天に任せて、単独基地へ急いだ。零戦六機の護衛があり乍ら、敵の奇襲をまともに受けた我々は残念であったが、零戦隊としては精神的窮地に叩き込まれたことは気の毒なことであった。我々は基地到着までの編隊を見ることはできなかつた。

米軍のエアコブラのパイロットも、六機の零戦の存在を知り乍らの攻撃は、無謀なほどの勇敢さで、然も島蔭に、超低空で隠れ乍ら、我が艇の離水時の弱点にタイミングを合わせたところは感心であった。然し、我が飛行艇の速力を、過少に判断したと見え、

弾丸は皆、後部へ飛んでおり、墜撃には至らかつた。

エアコブラはプロペラボスに、三十七ミリの機関砲一門と、翼前縁に両舷、それぞれ十三ミリの機銃を二門装備していることになっていたので、三十七ミリを被弾しなかつたことはせめてもの幸運であつた。

救出時、反対側の木立の中に、ちらちらする二、三人の人影を確認して、一応警戒はしていたが、無線電話でガダルの米軍に通報する土人たちとは考えも及ばなかつた。艇内のタンクは被弾漏洩して、残燃料に不安があつたが、翼内タンクは無事であつたので、間に合う計算になつた。搭整の鶴岡上飛曹は、着水時に備えて、艇底の損傷個所の点検を始めた。

実際の十三ミリの被弾は十発くらいであるが、それが炸裂するし、また、打ち破られた機体破片が飛散しては、その周辺を破壊するので、その

破孔は、数えられるものではなかつたが、あらかじめ準備していた侵水を止めるための応急処置材としての木栓を打ち込み、精一杯の処置をした。機長の指示により、第二信として「被弾の為、艇底の破損甚だしく着水時、侵水沈没のおそれあり。」と打電した。重症の機体は重傷の乗員を乗せて、〇七三〇シヨートランド基地上空着、下を見れば基地員の殆んどが棧橋に集つてゐる。皆が心配してゐるのである。

着水後、急いでパイを取る。侵水沈没を防ぐための応急用ゴム浮舟が、艇の両側を抱きか、える第一段階の作業が行われる中に、重傷の梅村二飛曹を始め、三名の負傷者と零戦の乗員は、待機していたゴム艇上の看護科員によつて、即刻病室に移動された。機長以下元気な搭乗員は、二回目の迎えのゴム艇に乗って上陸し、病室へ行つた。

この時は周囲の状況から病

室が指揮所の形となり、機長の報告が八五一空司令和田三郎大佐、副長兼飛行長伊藤祐満中佐列席の中に飛行隊長池上力少佐に行われた。

梅村二飛曹は、出血の為、沈黙していたが、「ビールを下さい。」と軍医長に請願した。軍医長は死期を見取つたのか、「ビールをやれ。」と静かに命じた。梅村二飛曹はコップを口にあてると静かに息を引きとつた。梅村二飛曹は、機内で、水を欲しがることはあつたが、絶命するまで、苦しみ悶えること一つなく、宜しく頼むと願う彼の眼差しは、病床の幼児が、母親を慕ふ、安らかな心の落ち着きに似て、優しく、崇高の極みであつた。戦闘機の乗員は、自分は無事救出されたが、その身替わりとして、他隊の乗員を戦死させてしまったことについて、自責の念にかられ、「申し訳ありません、今度出撃したら体当たりして御恩に報います。」と集合していた隊員の

前で、土下座して詫びた。

並びいる士官も下士官、兵も、連日の悲惨な戦闘の中に、感情も麻痺していた昨今ではあったが、梅村二飛曹を亡くし、苦悩する零戦の乗員の姿を見て、お互い明日のない我々ではあったが、涙を押えることはできなかった。同日午后、目と鼻の先の戦闘機隊のブイン基地から、お礼とお詫びと、一機撃墜、一機不確実の知らせがあったと知らされた。

梅村二飛曹とは、昭和十七年の十二月二十日〇二五〇（日本時間）シヨートランド基地を発進して、〇七二〇、レンネル島西方海面において敵機動部隊を発見したとき、敵戦闘機の追躡を受けたが、これを振り切ったことがあった。（機長は同じく高橋飛曹長）生死を共にして働いた戦友の中でも、実に温厚なビールの好きな好青年であった。なお当時の救難の場合、専門の医務科の隊員が同乗してい

たら、または私達が救護法を今少し勉強していたら、梅村二飛曹は一命を取り止めていたのではなかったらどうかと、申し訳なさと共に、悔やまれてならないのである。

戦後、防衛庁戦史室にある二五二空の戦闘詳報を見ると、十八年一月二十六日チヨイセル島東端不時着搭乗員救助。戦闘機直接掩護。ブイン基地〇四三〇発、〇五五〇〜〇六四三搭乗員救助、〇六五五空戦、〇七三六〇帰着。指揮官、大尉、塚本祐造。上飛曹、花房亮一。飛長、小坂孫一。飛曹長、兒島静雄。上飛曹、宮内行雄。飛長、羽山幸雄。P-39一機撃墜、一機不確実。救出搭乗員、塚原四郎飛長とある。

六機の零戦の中に一人位同期が居るのではなからうかと、空中で思ったりしたがそのままで接近しなかつたので判らなかつた。上飛曹宮内行雄は私の同期生で、その年の十月六日、ウエーキ島へ敵機動部隊

来攻時、戦爆連合百余機を邀撃して被弾、壮烈なる自爆を遂げている。（二五二空）戦争と言うものは、落すか落されるか、殺すか殺されるか、全く非情なものであった。

高橋飛曹長のペア（組）は、緊急時には特に選ばれて行動を命ぜられたが、機長の周密大胆な運用と、幸運に恵まれてよく任務を遂行した。明日のない我々は、連日の激闘による消耗によつて、第八一航空隊の兵力も減少して、作戦不可能となり、再編成のため、十八年二月二十四日台湾の東港基地へ引き上げたが、開戦前、勇躍東港基地を後に出陣した搭乗員約二百五十名の内、約一割が生存したに過ぎなかつた。

当時の飛行艇のペアは
機長 飛曹長 高橋 幸蔵
（偵練、六志、健在）
操縦員 二飛曹 吉良 正弘
（操練四十九期、健在）
同 飛長 後藤 三郎

偵察員 飛長 木下 義好
（丙三期、後戦死）

同 飛長 藤本 義隆
（丙三期、後戦死）

同 上飛 山口（不明）
（丙七期、後戦死）

電信員 上飛曹 平山 幸夫
（甲三期、健在）

同 二飛曹 梅村 慶蔵
（甲六期、戦死）

搭整員 上整曹 鶴岡雄二郎
（九志、高整、生死不明）

同 二整曹 横田 稔
（十三志、高整、生死不明）

戦闘機の搭乗員氏名
大尉 塚本 祐造
（海兵六十六期、健在）

上飛曹 花房 亮一
（四四期操練、健在）

飛長 小坂 孫一
（不明）

飛曹長 兒島 静雄
（二期操練、後戦死）

上飛曹 宮内 行雄
（甲三期、後戦死）

飛長 羽山 幸雄
（丙二期、後戦死）

救出搭乗員氏名

飛長 塚原 四郎

(丙三期、後戦死)

筆者略歴

大正十年八月一日生

熊本県出身

昭和十三年十月一日海軍第三期甲種飛行予科練習生として横須賀海軍航空隊入隊、昭和十八年十一月一日海軍飛行兵曹長、昭和二十年五月一日海軍少尉

勤務航空隊、横空―霞空―鈴空―大村空―佐世保空―東港空―八五一空―横空―鈴空―十四航艦―一〇二一空―一〇八一空―一〇二二空―一〇八一空

昭和三十年一月海上自衛隊入隊、昭和四十年四月一日日本航空株式会社入社、航法教官として現在に至る。

雄翔館見学者所感

リアルな話などを聞いて昔に行ったような気になれて、良い経験になりました。

令和四年十月

たにぐち様 (17歳)

御国のために、と若き命を散らせた青年諸君の姿を拝見し胸が熱くなりました。皆様、それを誇りにと思いい心をふるい立たせて旅立ったのでしよう。ただただ悲しいことです。今の世を見たらさぞびつくりすることでしょうね。ひたすら願うことは……命は大切に。争いはなくなりますように。

空と海と、青年たちに祈ります。

令和四年十月

高崎市 (30代の息子の母)

自分たちが今、こんなに平和で生活することができて

いるのには、色々な人たちの死があったからだと思えます。この見学を通して、予科練生の深い想いや、私たちに伝えたい事がわかった気がします。私たちのために最後まで戦ってくれて、平和な世界を作ってくれた予科練生に感謝しました。

令和四年十月

土浦市 高橋様 (17歳)

本日来館、人生三度目、一度目は2・3年前、幼く覚えておりません。戦争というものに実感もありませんでした。そして月日が経ち二度目、先月来館した。私が父にねだり、車で約2時間、そして現在三度目、ここは不思議で、勝手に小言声になってしまいます。体が、戦没した兵士や戦争で亡くなった人達への、同情と感激と敬意を表しているのかもしれない。

本当は一人できたいですが、まだ学生な故難しいです。私と同じ年の人ですら命をなげ

いれる戦地向かうために訓練をされているのですよね。皆、私と同じように、遊んで、学んで、食べて、寝て、が、できない人もいると思うと、空にあこがれた予科練習生の気持ちは、わかりかねます。わかりたいんですけれどね。私は戦争のおろかさを教えてくれた人々に厚い敬意を払います。

令和四年十月

古河市 三島様 (15歳)

みなさんがわたしたちのみのちをすくってくれて自分のうですくってくれてとても感しゃしてます。若い血潮の予科練の七つのボタンは桜に锚 今日飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にや がかい希望の雲が湧く。

令和四年十月

(住所記載なし)

かわなみ様 (9歳)

退官してから 元海自 航空部隊出身です。 沢山 学び、

子供達に伝えていきます。
この強い 人、家族、国を愛する心。忘れてはいけないと思います。伝える活動をしています。

令和四年十月

呉市 久村様 (53歳)

最初はだれだって命を絶つのはいやだろうと思っており、特こうたいいんの方々はどんな気持ちで飛び立ったのだろう、やはりいやだったのではという気持ちが強かったが、手紙を見るかぎり、「光栄だ。」や「二台目の飛行機を見てください」などのいしよ(手紙)がつづられていたことにかんげきした。現代において戦そうは人がさまざまに思いを残して死んでいくものだが、特こうたいいんほど悲しい思いとけついをのこしたものたちはいないと感じた。無ろんだれだつて命を自分からたちにくのはいやだろう。そんな中でその気もちをおしころし「光栄だ。」「自分が……」等

の気もちをだして戦場に向かつた者は本当はどんな事を思最後何を思い死んでいったのだろうか。それを思わせるなにかがあつたのはいうまでもない。

よいべん強になつたと思う。

令和四年十一月

住所記載なし

飯田様 (11歳)

涙とまらず

令和四年十一月

板橋区

飯島様

自分の為だけに生きるのでは無く家族、国の為尊い命をささげる事への使命感、彼らのまなざしに唯々頭が今平和に生きていられる事の礎をつくりあげて下さつた彼らの分も一日一日を大切に 生かされてる有難さを充分に頭において総じて戦争のない日本に尽力すべきだと痛感しました。
一人の母親として彼らは可哀想でなりません。でも彼ら

を誇らしく思い尊ぶ心無くして彼らは浮かばれないでしょう！最後の最後まで誇り高く生きて下さつたと心より感謝し心にとめていきます。先月は広島今月中旬は知覧へ行きます。忘れない事が大切。心より安らかに！と祈つております。次の世界ではきつと幸せな日々を送つてくれると信じています。

令和四年十一月

住所記載なし

飯田様 (70歳)

(公財)海原会寄付者芳名簿

(敬称略) (単位千円)

令和五年一月より

- 一五 井上 満二(乙23)佐賀
- 二 加賀谷有里(一般)茨城
- 一〇 明石 英次(甲9遺)東京
- 五 河村 和哉(一般)広島
- 五 後藤田哲朗(甲11)神奈川
- 一〇 石原 良祐(甲7遺)神奈川
- 一〇 伊勢 準造(乙24)秋田

- 五 金塚 雅恵(一般)東京
- 五 近藤 智(乙22)香川
- 五 蛭田 章(乙24)茨城
- 一〇 長部 邦宏(一般)大阪
- 五 戸張 礼記(甲14)茨城
- 五 福本 貞之(乙21)静岡
- 五 平野 勇二(一般)宮崎
- 五 城島 宗安(甲14)長崎
- 二 伊藤 元夫(一般)北海道

海原会へのご芳志

誠に有難うございました。

事務局日誌

一月

四日

事務局御用始め

十九日

慰霊祭実行委員会

於 事務局

参加者 酒井実行委員長

篠田理事、平野理事

二十六日

武器学校との調整

於 広報班会議室

平野事務局長が、広報班長及び広報幹部と慰霊祭について打ち合わせを行った。

二十七日

三者連絡会

於 事務局

予科練平和記念館、阿見町観光ガイド、海原会による三者連絡会を開催
平野事務局長が参加した。

二十七日

霞ヶ浦高校校長表敬

於 霞ヶ浦高校

阿見観光ガイド会長と霞ヶ浦高校校長を表敬、慰霊祭の支援について依頼した。

二月

十日

施設学校音楽隊定期演奏会支援

於 なかみなど市民会館
要請を受け、行方参与が演奏会の司会進行を支援した。

十五日

三者連絡会

於 事務局

予科練平和記念館、阿見町観光ガイド、海原会による三者連絡会を開催
平野事務局長が参加した。

十七日

武器学校OB会幹事会

於 広報班会議室

酒井副理事長、平野理事、篠田理事が出席した。

二十二日

NHK記者来訪

於 事務局

NHKメディア総局の記者が来所し、取材協力を依頼された。平野事務局長が対応した。

二十五日

慰霊祭準備個別調整

於 事務局

篠田理事が来所し、平野事務局長と慰霊祭の準備について個別調整を実施した。

二十五日

甲飛喇叭隊隊員来所

於 事務局

塚隊員が来所し、海原会

への協力について平野事務局長と調整を行った。

二十五日

二月理事会

於 事務局

二月理事会を開催

参加者 安井理事長、酒井、星指副理事長、平野、篠田、湯原、山下理事、行方参与
保坂理事はZOOMで参加

加

二十七日

小さな展示室模様替え

於 雄翔館

小さな展示室の模様替えを行った。平野理事、行方参与が実施した。

三月

四日

第二回慰霊祭実行委員会

於 事務局

酒井実行委員長他十一名の実行委員が出席して、慰霊祭の実行要領について打ち合わせを行った。

四日

早稲田大学研究員

清水亮様来所

於 事務局

平野事務局長が対応した。

六日

雄翔園五葉松伐採

於 雄翔園

虫害により立ち枯れた五葉松の伐採供養を行った。

八日

阿見町更生保護女性の会長来所

於 事務局

慰霊祭支援依頼の細部について事務局長が説明した。

十四日

小野評議員視視察

於 事務局

小野評議員が、業務視察に来所、平野事務局長が業務遂行

状況等について報告した。

二十日

予科練平和記念館運営協議会

於 豫科練平和記念館

平野事務局長が出席した。

海原会会員の皆様へ

小さくてもあたたかい

一日葬 家族葬

お葬式のご依頼や
「もしものとき」に
備えた事前のご相談
年中無休で承ります

相談
見積 **無料**

お客様満足度
99%

※
自宅葬、日葬、お別れ会のほか、
ご希望に合わせた
お葬式プランがご用意されています。

※当社施行客アンケート調べ

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

お墓

お墓のことなら何でもご相談ください。墓石工事は信頼の10年間の保証書付きです。

墓所工事

標準価格
(10万円以上)の
10%割引

サービス提供エリア:
関東・関西・東海



「お墓のお引越しガイド
& 事例集」

無料で資料を差し上げます。

お葬式

葬儀一式をセット化した「葬儀式セットプラン」を各種ご用意。最適なプランをお選びいただけます。

葬儀

祭壇標準価格の

20%割引

※一部斎場、一部商品を除く。
新花で送る家族葬は
優待料金

サービス提供エリア: 関東



「お葬式の流れが
わかる100項目」

無料で資料を差し上げます。

お仏壇

仏壇店は首都圏に2店舗(国分寺・千葉)。伝統型仏壇や家具調仏壇、手元供養商品まで豊富な品揃えです。

仏壇

店頭価格の

25%割引

※ただし、催事特価品と
仏具小物、手元供養商品
は対象外

サービス提供エリア: 関東



「お仏壇カタログ」
「特選 お位牌」

無料で資料を差し上げます。

お問い合わせは
海原会事務局へ

029-886-5400

お問合せの際は、「予科練を見た」とお申し出ください。

MAO
MEMORIAL ART OHNOYA

メモリアルアートの大野屋

<http://www.ohnoya.co.jp>



「予科練」第47号5・6月号
昭和53年7月26日第3種郵便物認可

令和5年5月1日発行
（隔月奇数月1回1日発行）
編集人 安井 剛

保坂俊雄

発行所 下

300-0301

公益財団法人 海原会
茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1

(慎輝ビル3階)

郵便振替
001401915433
00291886164002

定価500円